冒険小説から探偵小説へ
――コナン＝ドイルの転回点

佐々木徹

『英国古典推理小説集』(岩波文庫、二〇二三年四月)を編集した時、コナン＝ドイルの作品は入れなかった。この本を手に取ろうという読者がドイルになじみのないはずはないと思ったからだ。だが、ホームズ誕生以前のドイル作品となると、詳しく知る人は多くないだろう。

ホームズが初めて登場する『緋色の研究』が出版されたのは一八八七年十一月のことであった。それまでにドイルは約三十の短篇小説を世に問うている。これらのほとんどは冒険小説、スリラー、あるいは幽霊譚で、残念ながら、印象に残る作品は極めて少ない。

ドイルの処女作は「ゴアズソープの幽霊屋敷」(一八七七?)と考えられる。昔惨劇のあった屋敷に幽霊が出没する、というまことに単純素朴な物語。出版社の倉庫に眠ったままだった原稿が二〇〇〇年に初めて出版されたのだが、埋もれていたのもむべなるかなである。

彼の作物で最初に活字になったのが「ササッサ谷の怪」(一八七九)。南アフリカのササッサ谷には幽霊が出るという言い伝えがあり、つい最近もそれを見た者がいると聞いた二人組は、その正体を見極めようと谷に分け入る。そして怪しい光を発見。近寄ってみるとそれはダイアモンドと判明し、二人は大金持ちになる。これもまた他愛無い作品である。

初期作品で、十年ほど前に話題になったのが『ジョン・スミスの物語』。一八八三年に書かれ、出版社宛てに投函したところ、郵便事故で紛失。ドイルは記憶を頼りに書き直すのだが、結局中断してしまう。長らく陽の目を見なかったその原稿が二〇一一年に出版された(本にして約百二十頁)。痛風とリューマチで安静を命じられた五十がらみの主人公が自らの思うところを記す部分と、隣人たちなどと交わす会話から成り、随想集といった趣が強い。話題は宗教、政治、科学、哲学、文学など多岐にわたる。自伝的な色が濃く、作家を知るための貴重な資料と言えるかもしれないが、小説として読むと失望させられる。

私見によれば、この時期の三十作の中でおもしろいと言えるのは三篇ほどである。射撃大会で優勝候補者が最後の一発を放つ瞬間に照準の先に自分の姿を見てしまう、という魔術がらみの「決勝の一発」(一八八三)。ならびに、同年の「幽霊選び――ゴアズソープ屋敷の幽霊」。まぎらわしいが、上で触れた似た題名の物語とはまったく別物で、古城を購入した男がそれに見合う幽霊はいないかと探していると、幽霊なら売ってやろうという人物に出くわすウェル・メイドな笑劇。ただ、これらはどちらも一つのアイデアに少々肉をつけて膨らませただけのものにとどまり、物語として読みごたえがあるのは「ジェレミー伯父の家」(一八八七)だけだろう。この作については少し詳しめに紹介を試みたい。

私こと医学生ロレンスは友人サーストンから手紙を受け取り、イングランド北部のヨークシャーの片田舎を訪ねることになる。

寒々とした低い丘を越えて道は続いていた。痩せて腹を減らした羊がちらほら見える。これらの餌となる、針金のような硬い草が地表を薄く覆っているのと、ハリエニシダの茂みが散在するほかは、あたりに何の植物も生えていない。(中略)灰色の花崗岩がいかめしい顔を覗かせるごつごつした斜面が、ところどころで単調な景色にアクセントをつける。その様子は自然がひどい怪我をして、痩せ細った骨が皮膚から突き出しているかのようだった。

サーストンは、へたくそな詩を書きまくる気のいい変人ジェレミー伯父の屋敷に滞在している。屋敷には筆耕担当の秘書コパーソーンと美人家庭教師ミス・ウォレンダーがいる。元をたどればインドの族長の娘である彼女は、ジェレミーが引き取った、亡弟の子供を教えている。子供は三人いたのだが、一番下の子は少し前に庭で死んでいるのが発見されたのだった。屋敷に来てしばらくすると、ロレンスはコパーソーンとミス・ウォレンダーの不思議な関係に気づく。

コパーソーンは家庭教師に愛情を抱いているが彼女の方はそれを歓迎していない、という私の確信については既に述べた。数日すると、この報われぬ感情のほかに、二人を結びつけている何かがあるように思えてきた。一度ならず彼が彼女に対して、上位者の権威とでも言うしかない力をもって接するのを見た。また、彼らが深夜芝生を歩き回って熱心に語り合っているのを二、三度目撃した。二人の間にどういう了解があるのかさっぱり見当がつかず、この謎は私の好奇心をいたく刺激した。

また、ミス・ウォレンダーはただならぬ荒々しさを秘めていると判明する。

我々は田舎道を歩き、彼女がかつて

何か月か滞在したドイツの話をしていた。と、突如彼女は立ち止まり、唇に人差し指を当て、「杖を貸してください！」とささやき声で言った。杖を貸すと、驚いたことに、彼女は足取り軽く音もなく駆け出して、生け垣の隙間を通り抜け、前かがみになって、小さな塚の後ろに隠れながら速足で進んだ。こちらが唖然として見ていると、にわかにウサギが彼女の目の前に現れ、走って逃げ出した。彼女は杖を投げつけ、それがウサギに当たった。ウサギは逃げおおせたが、足を引きずっていた。

そして、ある日、ミス・ウォレンダーはコパーソーンについて主人公に衝撃的な告白を行う。

「あの人の名前なんて金輪際聞きたくありません」彼女は強い感情をこめて叫んだ。「あの名前は憎い。あの人も憎い。ああ、誰か私を愛してくれる人がそばにいたなら――海の向こうの私の国のやり方で愛してくれる人がいたなら、その人に私は言うでしょう」

「何と言うのです？」この驚くべき激昂ぶりに仰天して私は言った。

彼女はぐいと身を乗り出し、私は顔に温かい息が吹きかかるのを感じるような気がした。

「コパーソーンを殺して――そう言うでしょう。コパーソーンを殺して。愛の話をするのはそれからにして、と」

サーストンは父親に呼び出されてロンドンに出かけてしまい、ロレンスは一人で田舎に残される。突然、村にインド人の旅人が現れる。ミス・ウォレンダーはひそかにこの男に憐れみを見せる。その後ロレンスは彼女と秘書の会話を立ち聞きする羽目になる。なんと、彼女は殺人こそ女神カーリーに対して人間が捧げ得る最も崇高かつ純粋な供物とするインドの殺人集団タギーの首領で（死んだ子供の件もこれにからんでくる）、この事実を察知したコパーソーンは、黙っていてやるかわりに、ジェレミーを殺せと脅迫する。彼はこの善人に巧みに取り入り、老人亡き後、巨大な土地財産がすべて自分のものになるような趣旨の遺言を書かせたのだった。主人公は一人でこの殺人計画を阻止せねばならなくなる――。

ここで作品の内容から離れて、ドイルのキャリアにおける本作の位置について二つの点から考えてみよう。（一）、概して平凡な作品を発表してきたドイルがここに来て（一八八七年）かなり出来のよいものを作った。（二）、主人公ロレンスは医学生でベイカー街に住み、ジョン・H・ワトソンならぬジョン・H・サーストンの名を持つ彼の友人はもっぱら科学の実験に興じているなど、本作には来るべきホームズものの構成要素がいくつか既に観察される。『緋色の研究』が出るのは僅か一年足らず後のことである。

この時期のドイルにとって重要な意味を持った作家が、『宝島』（一八八三）で名を成したスティヴンソンだった。どうやら彼を手本に学んだレッスンが「ジェレミー伯父」でようやく実を結んだと思しい。「スティヴンソン氏の小説作法」というドイルのエッセイ（一八九〇）を見れば、次々に繰り出される引用からして彼が如何にこの作家を読み込んでいたかが容易に窺い知れる。彼が惜しみない賛辞を呈する「臨海楼綺譚」（一八八〇）はスコットランドの辺縁の地にイタリアのカルボナリ党の一団が暗躍するという趣向の物語。ドイルの「ジェレミー伯父」は僻（へき）村に外国人が侵入してくるモチーフに加えて、印象的な自然描写とサスペンスの巧妙な盛り上げをそこから受け継いでいる。

いや、それだけではない。ドイルは八七年以後冒険小説から探偵小説に重点を移行させることになるのだが、そのプロセスにもスティヴンソンが刺激を与えた可能性は十分ある。「臨海楼」と同じく『新アラビア夜話』（一八八二）に収録されているコミカルで奇抜な都会的冒険小説「ラジャのダイアモンド」（一八七八）において、宝石盗難事件に巻き込まれる主人公のボヘミア国皇太子フロリゼルは自らの身の上を探偵のそれに比し、我々は共に「犯罪を相手にする戦士」であり、「弱小で不名誉な君主になるより鋭敏で気高い探偵になりたい」とのたまう。さらに『続・新アラビア夜話』（一八八五）では、『緋色の研究』の物語の核を成すモルモン教団の恐怖が描かれている上に、大都会に発生する幾多の謎に挑まんとする主人公の一人が、「探偵こそ紳士にとって唯一の職業だ」と言うのである。

名探偵ホームズ誕生に際し、ポーやガボリオといった先達、ならびにエジンバラ大学のベル教授の存在が要因となったことはよく知られている。だが、さほど目立たぬものの、スティヴンソンのもたらした一種の触媒作用も看過できないであろう。

（ささき　とおる・英文学）

豊かで多様な〈近世〉のすがた

日本近世史を見通す　全7巻

8月刊行開始　各3080円

❶ **列島の平和と統合**　近世前期
牧原成征・村　和明編　グローバル化のなかで動き出す「近世日本」成立のうねり。（8月刊）

❻ **宗教・思想・文化**
上野大輔・小林准士編　（9月刊）
※以下続刊　『内容案内』呈

九州の名城を歩く
【宮崎・鹿児島編】　2750円
岡寺　良・竹中克繁・吉本明弘編
精選した名城64を平易に紹介する好評シリーズ第3弾。〈既刊〉福岡編／熊本・大分編…各2750円

時に大衆を動かし、時に統制されながら近代日本を動かした〈メディア〉の存在とは！

近代日本メディア史
全2巻　有山輝雄著　各4950円
【Ⅰ】1868―1918　明治維新後の「文明開化の新聞紙」から、政府による統制、第一次世界大戦まで。
【Ⅱ】1919―2018　新聞紙によるニュースからラジオ・テレビ・インターネットによるニュースへ。

弥勒信仰　もう一つの浄土信仰
速水　侑著　釈迦没後56億7000万年後に訪れる幻のユートピア！
【読みなおす日本史】　2420円

歴史文化ライブラリー

575 **賃金の日本史**
仕事と暮らしの一五〇〇年
高島正憲著　数字とデータで読み解く賃金と生活水準。2200円

576 **江戸に向かう公家たち**
みやこと幕府の仲介者
田中暁龍著　多彩な生き様を取り上げ社会の諸相に迫る。1980円

吉川弘文館
東京都文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151
目録・呈　価格税込